様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１３４０１
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｈ０１３０８

研究課題名（和文）戦後日本における戦傷病者の自立に関する歴史研究

研究課題名（英文）Historical Research on Independence of War Disabled Veterans in the Postwar Japan

研究代表者
藤原　哲也（Fujiwara, Tetsuya）

福井大学・学術研究院医学系部門・教授

研究者番号：３０３６２３３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,700,000円

研究成果の概要（和文）：戦後日本における戦傷病者の自立についての解明を目指した本研究は、以下の三点の成果を得た。第一に、戦傷病者とその家族の手記を検討するなかで、戦傷病者の戦闘体験の有無による語りの内容の違いが認められ、彼らの多くは戦争による受傷病体験を語る一方で、妻は自立に向けた生活上の苦労について語る傾向が観察された。第二に、戦傷病者への家族への聞き取り調査から、障害を抱える夫たちが経済的な自立だけでなく精神的な自立の理解を日本社会に対して求めていた事実を確認した。第三に、戦後期に実施された一般身体障害者の巡回相談の分析から、彼らは戦傷病に加え、加齢に伴う健康問題が自立の課題となっていた事実を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の学術的意義は、戦後期に焦点を当てて戦傷病者の自立の問題を多面的に扱った点にある。これまでの日本の戦傷病者に関する歴史研究では、アジア太平洋戦争の戦前・戦中期を扱った研究が多いが、戦後期における彼らに関する分析は不十分であった。このため、彼らの戦後期における生活実態の把握に努めながら、彼らがどのように自立しようとしたのかを観察した。また、本研究の社会的意義に関して、戦後80年近くが経過し、彼らの存在自体が歴史のなかで忘却されようとしている状況の中で、彼らが自立を目指して生活したことを戦後史のなかで位置付けようとした点が挙げられる。

研究成果の概要（英文）：The research aiming to elucidate the independence of war disabled veterans in postwar Japan, has achieved the following three results. First, in examining the memoirs of disabled war veterans and their families, we found that the content of their narratives differed depending on whether they had experienced combat or not, and while most of them talked about their experiences of war-related injuries and illnesses, their wives tended to talk about the difficulties they faced in their lives toward independence. Second, interviews with the family members confirmed the fact that the disabled husbands sought not only economic independence but also spiritual independence from Japanese society. Third, an analysis of consultations conducted during the postwar period with the general disabled population revealed that in addition to their war injuries and illnesses, their health problems due to aging had become another challenge to their independence.

研究分野：障害史

キーワード：戦傷病者　日本近現代史　障害史　戦争　自立　傷痍軍人

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景
（１）近年、障害者史研究の世界的な発展を背景に戦傷病者を対象とした研究に注目が集まっている。それらの研究群は国家と障害の関係を主に分析してきた。日本においても第二次世界大戦以前の戦傷病者に関する研究では一定の成果を収めている。しかしながら、戦後期の戦傷病者に焦点を当てた研究は少なく、日本における国家と障害の関係を十分に解明するまでには至っていない。

（２）申請者たちは、国内外の戦傷病者に関する研究動向に注意を払いつつ、「自立」を軸に第二次世界大戦時の日本の戦傷病者に関する歴史研究に従事してきた。なぜなら、戦時中、国家は国威発揚のために戦傷病者の自立を促す施策・制度を積極的に推進し、彼らもこの国家的要請に応えようとしたからである。申請者たちは、戦傷病者の自立を＜ヒト＝家族＞・＜サービス＝医療・看護＞・＜カネ＝経済＞の視点から精査し、彼らの自立には経済的自立だけでなく、名誉の確立をはじめとする精神的自立という意味も含まれていたという結論に達した。

２．研究の目的
（１）本研究の目的は、戦後日本において戦傷病者がどのように自立を取り戻そうとしたのかを家族、医療・看護、経済の三つの視点から具体的に把握することである。

（２）申請者たちは、戦後期における戦傷病者の実態解明を通じ、戦争が社会および国民に与える長期的かつ多面的な影響を考察する。本研究の深化により、現代にも存在する「社会的弱者」を分析する視座を提供し、かつ、障害者史研究の更なる進展が期待できる。

３．研究の方法
（１）本研究に着手するにあたり、まずは戦後日本における戦傷病者の自立の実態解明のために戦傷病者の体験記・手記から彼らの戦後体験を＜家族＞・＜医療・看護＞・＜経済＞の三つの視点と照合し、彼らが実際に直面した生活上の問題を分類・整理し、参加研究者の間で共有する。この共通理解に基づき、各々の研究を遂行する。

（２）＜家族＞を扱う藤原は、戦後期における戦傷病者とその家族の生活実態を考察する。戦傷病者の体験記・手記には従軍時や戦中期における労苦体験が多く含まれているが、戦後期の彼らの生活実態に関する記述は限られる。そこで、藤原は、福井県傷痍軍人会妻の会元会員とその子女への口述記録（オーラル・ヒストリー）と戦傷病者の体験記・手記を付き合わせた比較分析から、彼らが戦後期の生活をどのように維持し、自立を図ろうとしていたのかを辿る。

（３）＜医療・看護＞を担当する山下は、戦傷病者に対する医療サービスに焦点を当てた更生援護事業の歴史を検証する。第二次世界大戦後、戦傷病者および身体障害者に関わる法律施行・実施に際して、戦傷病者に向けた医療・看護サービスを俎上に載せた先行研究は少ない。このため、山下は、医療・看護サービスに関する法律において戦傷病者がどのように解釈され、いかなる理由に基づきどのようなサービスが提供されたのかについて探求する。さらに、戦傷病者のサービスの実際の利用状況およびその効果の有無も検討する。

（４）＜経済＞に取り組む今城は、戦傷病者の生活を支えた戦後補償としての恩給制度史を分析する。先行研究において、戦後期において恩給が戦傷病者とその家族の生活をどのように経済的に支えていたのかについての詳細は不明な点も多い。とりわけ、恩給受給に際し、恩給の使途目的を含め、戦傷病者とその家族の意思決定プロセスは体系的に明らかにされていない。したがって、今城は、生計を立てるために戦傷病者が恩給を家計の中でどのように位置付け、利用してきたのかを考証する。

４．研究成果
（１）戦傷病者とその家族の手記を検討するなかで、戦傷病者の戦闘体験の有無による語りの内容の違いが認められた。具体的には、戦闘経験がないまま戦傷病で戦傷病者となった者が、戦闘の結果戦傷病者となった者に対して引け目を感じていたことが具体的事例から観察され、戦争体験を通じて認められる戦傷病者の多様性を確認できた。また、彼らの多くは戦争による受傷病体験を語る一方で、妻たちは自立に向けた生活上の苦労について語る傾向が見受けられた。

（２）戦傷病者への家族への聞き取り調査から、障害を抱える夫たちが経済的な自立だけでなく精神的な自立の理解を日本社会に対して求めていた事実を確認した。総じて戦傷病者は「傷痍軍人会」を自らの戦後のアイデンティティの重要な拠り所として認識した。一方、戦傷病者の妻たちは「妻の会」を夫たちの戦争や戦傷病への特別な想いとは別に、女性たちの親睦団体として参集していたことが判明した。

（３）戦後期（1970 年代）に実施された一般身体障害者の巡回相談の分析から、彼らは戦傷病に加え、加齢に伴う健康問題が自立の課題となっていた事実を明らかにした。巡回相談が戦傷病者の特質を考慮しつつ,一般身体障害者に包摂しようとした好個の事例であることを示した。この知見は,戦傷病者と一般障害者を個別に扱ってきた日本社会福祉史や障害者史研究に新たな視点を提供するものであると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　5件）

１．著者名 山下麻衣	４．巻 4
２．論文標題 戦傷病者戦没者遺族等援護法と更生医療- 戦後復興期の京都府を事例として	５．発行年 2023年
３．雑誌名 障害史研究	６．最初と最後の頁 13-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/6779681	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 山下麻衣	４．巻 17
２．論文標題 看護の歴史とジェンダー	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ジェンダー史学	６．最初と最後の頁 65-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山下麻衣、藤原哲也、今城徹	４．巻 2
２．論文標題 矜持と労苦：傷痍軍人とその妻の戦後経験	５．発行年 2021年
３．雑誌名 障害史研究	６．最初と最後の頁 79-97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15017/4377792	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Mai Yamashita	４．巻 -
２．論文標題 Disabled people and the labor market in the 1950s: the Japanese experience	５．発行年 2021年
３．雑誌名 International Journal of Asian Studies	６．最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1479591421000048	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 Toru Imajoh	4．巻 -
2．論文標題 Disabled veterans and their families: daily life in Japan during WWII	5．発行年 2021年
3．雑誌名 International Journal of Asian Studies	6．最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1017/S1479591421000085	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 山下麻衣	4．巻 58(1)
2．論文標題 戦後復興期・高度経済成長期における付添婦の存続理由に関する研究-神奈川県を事例として-	5．発行年 2023年
3．雑誌名 経営史学	6．最初と最後の頁 27-51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 藤原哲也
2．発表標題 満鉄鉄道事故者の妻が語る夫の受傷体験と戦後の生活
3．学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会
4．発表年 2022年

1．発表者名 山下麻衣
2．発表標題 第二次世界大戦後における付添婦の存続理由に関する研究
3．学会等名 経営史学会
4．発表年 2021年

１．発表者名 藤原哲也
２．発表標題 戦傷者の妻が語る戦傷病者の諸相
３．学会等名 日本オーラル・ヒストリー学会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 山下麻衣	４．発行年 2021年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 2
３．書名 社会経済史学辞典	

１．著者名 藤原哲也	４．発行年 2024年
２．出版社 昭和堂	５．総ページ数 -
３．書名 職業教育とジェンダー	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山下　麻衣 (Yamashita Mai) (90387994)	同志社大学・商学部・教授 (34310)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	今城　徹（今城徹） (Imajoh Toru) (20453988)	阪南大学・経済学部・准教授 (34425)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関